

蠅螂の斧

次の一步

社会システムを変える

番外編

団 士郎

連載三回目の人間コミュニケーション論を期待している人を裏切ってしまう。私にとって立命館大学大学院、在職最終年度の後期セメスターが始まったら、進行中のそれを書くモチベーションが下がってしまった。今年は今でまた何かあるだろう。一期一会の積み重ねの結果が15回の授業後に起こるだろう。その意味を文章で決めつけることはない。今年のライヴは今年のものとして、期待して、眺めておこう。そんな気分なので、ここにはまた気まぐれに書きたいことを書く。

ふと、PC、ワープロを導入して、データが残っている日誌の一番古いのはいつだろう？と思った。こんなことを考えるのは、いつもの私のあり方だし、加えて加齢要因もあるに違いない。でも、ワープロもPCもない時代ではなく、それらが登場し始めた時期の記録は、今とは違ったそれなりの何かがあるかもしれない。道具（キーボード）によってもたらされたかどうかは分からないが、生じているはずの変化と、不変化を振り返ってみようと思う。

あの頃、ワープロのフロッピーディスクにあったものを、業者に無理を言って変換してもらった。これにははエプソンk.k.の窓口担当と一悶着あった。当初、問い合わせに対して、データを他社機種やPCで読めるよう変換することは出来ないと言った。私は「そんな馬鹿なモノを販売しているのか！」と強く批判した。するとPCのソフトに、データ変換できるものがあるが、それは我が社の業務サービスにも仕事にもないといった。すったもんだの末だったが、エプソンの担当者が個人的に持っている変換ソフトで、私のフロッピーディスク数十枚を、PCで読み込み可能なデータに変換してもらった。

それを98NOTEというPCハードディスクに読み込んだ。それを更に外付けハードディスクやUSBに落としておいたから、結果的に現存するデータが存在することになった。フロッピーのままのたくさんの記録は、読み込み機材のないまま山ほど捨てた記憶がある。

EPSON WORDBANK から始まったハードの変遷は数え切れない。機械には詳しくないが、見つかった最古の日誌データは1986年11月。31年前、私は39歳で京都府中央児童相談所・心理判定員(主任)だった。

二人の息子達がちょうど今、そんな年齢だ。自分の三十代なんてもう、想像もできない大昔の日々のようにも思えるが、その日誌をひもといて、何か書いてみることにする。

1986/11/6

沢木耕太郎「Switch」連載[246]を読んでたら、
またまた日記が書いてみたくなった。日記といっても、
読んでいる本や見たビデオ、芝居、映画、そのほか自
分のまわりの気がかりな事を書きたいように書くとい
うことだが。

この雑誌「Switch」は1985年に創刊
され、今も健在で、スイッチパブリッシングから刊行
されている。当時は扶桑社から
出ていたんじゃないかと思う。32年
前、創刊一年程の新井敏記編集長は、私も
そうだったように、沢木耕太郎ファンの若
者だった。

ここで連載されていた長文の日記は後に
「246」のタイトルで大判単行本として
同社から刊行された。この時点で、一ファ
ンだった私と沢木さんに関わり合いはな
い。

古くからの友人・桂南光さんがきっかけ
でお目にかかることになり、ある夜の宝塚
での食事会のことが、連載「246」に登
場した。

残念ながら単行本になる時、その日の日
記は外れたので、バックナンバーの号にだ
け、「関西人は公務員でも面白い」という
記述で登場した。そしてささやかに面識が
生まれ、当時楽しんで発行していたミニコ
ミDAN通信を送り続けた。今のツイッ
ター、facebookのようなことを郵送で行っ
ていた。

その後、氏のお嬢さんRちゃんのこと
で少し関わりができた。おそらくその結果
として、「家族の練習問題 第一巻」刊行時
に、コラムを書いてもらえたのだと思う。

当時、東京の編集者の間では、どうや
ったら沢木さんから原稿がもらえるのか！と

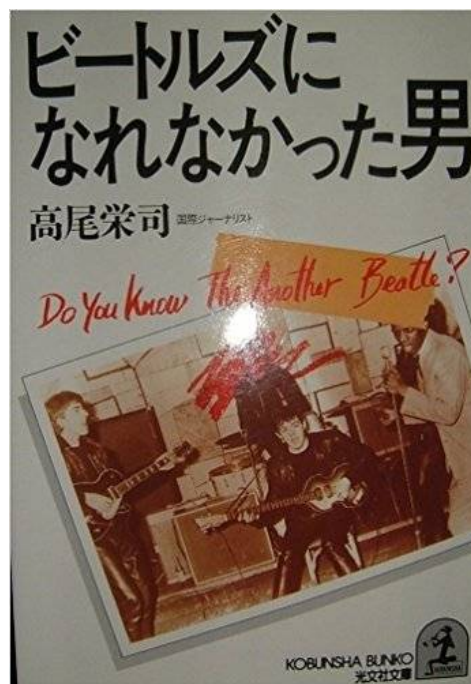
話題だったそうだ。更に第一巻には、大林
宣彦監督からのコラムも掲載されている。

この二本が、第2巻以降の刊行に際して、
多彩な方々からコラムをいただけるよう
なるのに大いに貢献しただろう。

「深夜特急」の読者から始まった沢木耕
太郎世界との交流はその後、様々な出来
事として、私の暮らしの中に結実してゆく
ことになった。

1986/11/6 (の続き)

今読んでいる本は「ビートルズになれなかった男」
高尾栄治 朝日新聞社刊。(写真は文庫版)ビ
ートルズにそんなに思い入れがあったわけでも、ことさら
にファンであったわけでもないが、やはり僕の時代の
ハイスクール・ライフは♪プリーズ・プリーズ・ミー♪が
BGMだろう。



自分をビートルズの申し子のように語る人
が、私と私の下世代には多い。でも、我が思春
期のポップスを振り返って見ると、そんなことは
ない。

E.プレスリーの後の、ニール・セダカ、クリ

フ・リチャード、ハリー・ベラフォンテ、キングストン・トリオ、ユニー・フランシス、フォー シーズンズ、ヘレン・シャピロ、PPM 等、たくさんのアメリカンポップス世代。

ビートルズがそこに彗星のごとく現れた、という書き方はいかにも慣用句だが、たしかに当時、アニマルズ「朝日の当たる家」とか、CCR、ビー・ジーズ等のグループも次々ヒットを飛ばしていた。

そんな中に「プリーズ プリーズ ミー」と「抱きしめたい」のドーナツ盤が現れた。そして洋版ポピュラー音楽全般もますます花盛りになっていった。私は今も、音楽が分かっている人間ではないので、結局この時代にもビートルズを見つけることは出来なかった。

昔の中之島フェスティバルホールには、ボビー・ライデル、オリビア・ニュートン・ジョン、ドゥービー・ブラザーズ、ロバータ・フラック、それからガラガラの京都会館でシャ・ナ・ナやビリーボーン楽団なんかを聴きに行っていた。

この本の主人公はピート・ベストという。ビートルズがリバプールから世界にはばたいてゆく直前まで、実質的にリーダーだった男の話である。ビートルズのドラムといったらリング・スターなのだけれども、ハンブルグとリバプールのライブハウスで演奏をして人気のあったビートルズのドラマー、ピート・ベストはどうしてメンバーからはずれたのか。

ビートルズの成功が並のものではなかっただけに、その周辺にいて幸運を掴んだ者と、タッチの差でも残らなかった者の間には、様々なドラマがあったに違いないというのが、著者の狙いである。何度もイギリスに足をはこんで、会える限り当時の関係者に会って書かれたこの本はとても面白かった。

しかし一方で、通り過ぎてゆく者と、そこに留まった者との間のドロドロした確執は、成功の大きさに比例して凄まじいものであるなと恐い気がした。

ピート・ベストはビートルズに関して一切批判や中傷をしていない。そそのかす音楽ジャーナリストをひたすら避けて20年を過ごしたという。負けてなるものかと別のバンドを結成して活動していたこともある。しかし余りにもビートルズの成功は大きく、その落差はいつも彼を脅かし続けた。死をも考え実行した彼が今、リバプール市役所に勤めながら、日本から何度も足を運ぶ著者に口を開いている。

誰が幸せを手にいれたのか、誰が幸運をつかみ損ねたのか、幸運の女神は誰の頭上にいたのか、それはなんとも言えるものではない。ピートの母親は「あの子は本当に男らしい強い子だと思う」と言っている。

事実などというものは人間の数だけあるもんだとは分かっている、やはり人はいろいろな事を言われながら生きてゆかねばならないものだ。辛いものだなーと思った次第である。

図書館で借りて読んだ本だがよく覚えている。いや、この日誌を書いて、それを読み返したせいで、記憶にとどまったのかもしれない。いずれにしても、思い出深い一冊である。

その後、この主旨でTVドキュメンタリーがたくさん作られた。ビートルズはとにかく偉大だった。でも、格別にファンだったとは言えない私は、LPは[HELP]一枚、あとドーナツ盤数枚を持っていただけだ。このLPは、現在、京都駅南口のイオンモールになっているあたりにあった松下電器の工場倉庫で一日、ニクロム線コイルを運び続けて手にした日当2000円で帰路のレコード店で買った。

ビートルズが我が青春だったなどと、後年になって語る事になる人達をうさんくさい目で見ている屈折した聴き手だった。

今に至るビートルズの名曲を素直に聴け

るようになって、CD化されたものを購入したのはずっと後だった。

1986/11/7

昨日の夜中、せつせと今月末、東京で開催される児童相談所問題研究セミナーでレポートする「家族療法」のレジュメをワープロで叩いていた。不用な部分を消去するためのキーを押していたところ、突然わけの分からない模様の画面になった。そしてどのキーを押しても全くコントロールがきかなくなった。

故障だ。困るのである、絶対に今は困るのである。今夜から、明日の宿直勤務(児童相談所には一時保護機能があって、その時には交替の夜勤がある)の夜中、そして週末と、日曜日までギッシリと予定が組んである。それぞれ締め切りのある文章だから、ワープロが修理から戻ってくるのを待っているわけにはいかないのだ。焦った。

誰かに借りようかと思っても、友人、知人にEPSON WORD BANK 五十音配列キーボード等を使っている者はいない。今年、初めてフロッピー内蔵を売りに新発売された機種だが、毎日新製品が出るワープロ業界だから、安くなっているようならもう一台職場に置いておけば便利だし・などとも考えた。

しかし定価138000円もするもの、とにかく何とか考えなくてはと朝を迎えた。

当時の事情を振り返って見ると、ワープロ全盛期の直前である。安価なものは二、三行表示の液晶画面が普通。記憶媒体としてフロッピーディスクが登場したのは、驚愕の記録保存媒体だった。それまで紙とし保存するものだった個人の記録が、データで残せる。当然後から加筆修正も編集もできる。

原稿を400字詰め用紙に書いて、清書のために一から書き写すのが通常だった時代からの大転換だった。

それに、50音入力のキーボードなんて当時でも化石だ。カナ入力ですらない。アイウエオ順にキーが並んだものだ。

ワープロを使い出してから、確実に文章を書く量が増えた。もともと書く事は好きだったが、清書するのが大嫌いで、そのうえ清書する尻から、直したくなくてしまい、結局はその労力にウンザリして挫折するのがパターンだった。フロッピー内蔵の機種を選んだのはその革命的展開が理由だった。とにかく文章にして、それから何度でも編集や校正をすればいいのである。

だから、だからである。ワープロが壊れてしまったら文章を書く気がしないのである。職場でその話をしたら、同僚の早樫君がいくつかの店をあたってみてくれたが、なにしろ古い機種！なものでどこにもない。(今年の1月に新発売を買ったんだぞ)しかもフロッピーにこれまで入れた文書は、他機種では読み込む事はできないという。

「そんな馬鹿な」と機械に弱い私は憤慨するが、このエネルギーはなにももたらさない。ともかくなんとかしなくてはならないので、まず壊れたワープロを修理にだし、それから寺町の家電街に行った。

一軒目の大きな店で「ここには置いてませんが、系列店に現品限りで1台おいてましたから、行ってみてください」という。急いでその店にゆくと「あ～昨日メーカーに返してしまいました」とのこと。4～5日で取り寄せますけど」と言ってくれる。販売価格は59800円だという。半額以下だ。しかし今直ぐ要るのである。4～5日は待てない。

仕方なしに店を出て、近くのワープロ・パソコンショップに入った。すぐ左手の棚に現品限り、特価品と書かれた古いワープロ機種が並んでいた。

そこになんとWORD BANKがあるではないか。この機種は全く同じ商品がSEIKOからcom-mediaという名前でも発売されていて、それもある。しかもなんということだろう、特価24800円!今年1月に138000円

で生協で、24回の分割払いで購入した僕は、まだ半分も払っていない。これはあんまりではないかと思っただが、ここはもう買うしかない。

そこで私は店員にこう言った。「この値段はアダプターついているの？」(アダプターは別売りで5000円、前にはそれで買っている)「いやーそれは別です」、「こんな古いワープロ誰が買うの、僕はこの機種もってて、フロッピーがあるから要るんやけど・・・、アダプターもつけて一な」、「ちょっと聞いてきます」と店員は奥に入った。更に店頭に並んでいた商品でしょうかいろいろ言っていると、アダプターを付けて、インクリボンももう一本余分にサービスしますということで話がまとまった。

そこで倉庫にパッケージを取りに行ったところ、現品ではなく、箱入りの新品が一台だけあるという。「そのほうが良いよ、それにして」と厚かましくも訳の分からないことを言って二台目を手に入れ、とにかくめでたく必要な文章を仕上げたというわけだ。

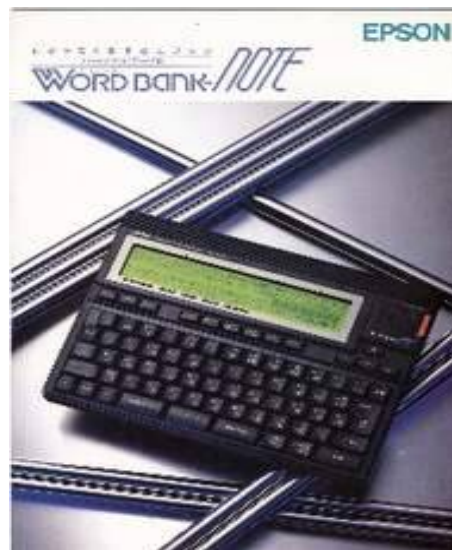
1月に138000円で買ったものが、11月には24800円で売っていた。何という進化。毎月のように各メーカーから発売されるワープロに進歩、進化があったのだ。当時の同僚高橋君は、F U J I T S U親指シフトキーボードの合理性を熱く語っていた。

この大波の後に、パソコンの個人所有時代がやってくる。私にとっては、ワープロからPCへの移行は、保存データ問題だけではなく、しばらく使い慣れた50音順入力から、アルファベット仮名入力への移行という、身についたシステムのリセットという負担を伴うものだった。

[javascript: void\(0\)](#)

- * ここに書いたワープロは持ち運べるサイズではなかったが、同じEpsonのWordBank note

も持っていて、鞆にいつも入れていた。



1986/12/3

11月23日に児童相談所問題研究セミナー(東京大会)で家族療法の報告をした。そこでフロアーからの「親の会会長」の発言を聞いて、色々な事を思った。

家族療法はひとつの技術にすぎない。それ以上でも以下でもないところの方法である。「登校拒否は情緒障害なのか？」という問いかけはレベルの違った別の議論である。そういう提起は、今考えているステージには同時に並び立たないものである。人によって事態の受けとめは様々であり、いちがいに本人の性格の問題であるとか、学校の問題だなどと決め込むのは信念であって、現象の事実側面について語ることにはならない。

学校に行かなくてもいいじゃないかと議論したり、考えたりできる場と人を身近に持てる人にとっては、それは大きな人生におけるチャンスになろう。

しかしただ閉じ籠もって為すすべもなく流されている者に、そんな理屈は一段上の自由論争に見えるだろう。

私としてはむしろ、子供が登校拒否を始めたことによって、学校へ行かせよう、行かせようではなく、学校がおかしいのではないかと疑問を持ちだすプロセスを

体験する家族に関心がある。

問題であるとか、ないとかではなく、選択できる現状把握の、そちらの側に立つ人にとっての家族生活、力動に関心がある。

人はだれもなんの特徴も持たないで平均に生きていたりするものではない。具体的症状(現象)を持つ小集団が、信念に近い意見と立場をもってガンバルというそのエネルギーに関心があるのだ。

私自身はよくも悪くも、そんな大上段にかまえて今の社会システムに問題提起をして頑張ろうなんて気持ちはない。多くの人達がおおむね良好と考え提示している社会(私は気に入っているわけではない)の中で、個人はどのくらい自分自身で暮らしていけるかということに関心が高い。自分の家族に関してもそうである。

ただこのくらいのプレッシャーはこれまでも、これからも、社会を構成して人間が生き続けてゆく限り無くなることはない。この程度のことが乗り越えるにせよ、諦めて降りるにせよ、自分の才覚で対応できなくてどうするんだと思っている。

これが書かれるに至ったきっかけの出来事を、はっきり記憶している訳ではない。おぼろげな記憶だが、類推してみる。

会場に当事者(不登校児の親の会関係者)が参加していた。私はこの時、不登校ケースに関することを取上げながら、児童相談所における家族療法のことを発表していた。

それについてのフロアーからの質問という形で、「登校拒否は情緒障害なのか？」という発言があった。

私の記憶の中に、「情緒障害」という単語が、専門用語として落ち着いたことはない。単語として存在し続けるのは、「情緒障害児短期治療施設」と呼ばれる施設があ

ったことによる。

仕事を始めて直ぐの頃、京都市には青葉寮という情短(情緒障害児短期治療施設)があった。全国にまだ10数カ所の時代だ。だが私の属していた京都府に、同種の施設はなく、是非とも必要だと余り深く考えずに思っていた。そしてその前提で、「情緒障害」についても、思い込んで発言していた時期があった。

しかし、「情緒障害」という言葉が、いわゆる専門用語ではなく、行政の中で使われているだけのカテゴリーであったこと。そして情緒障害が短期に治るのか？という疑問や、そもそも情緒障害って何だ？という疑問を早期に持ち始めていた。

現在では、様々な分類診断が発達障害のくくりの中に存在する。重なって「被虐待児童」とみられる子が多く、情短と呼ばれる施設に入所している。

私は当時から今に至るまで、不登校は「学校業界」に関わった人々だけの話題だと思ってきた。「学校に行っていない」と「学ばない」は同じではないし、「高学歴の人」と「賢い人」も同じではない。

よってたかって学校第一主義を作り上げた関係者(大人)が、それに足下をすくわれていると考えてきたから、「不登校」は状態には見えるが、問題ではない。

食べ物に好き嫌が多いから、栄養失調で餓死しましたなんて人はいない。好き嫌いは仕方ないが、生きるための栄養はとっておきなさいが正しい。つまり代替案だ。

「不登校」をしていると思っている考え方が、他のことをしなくさせる。不登校ならそれでも良いから、じゃあ、何をしようか？と問いかければ良い。

更に、何かしていなければ、生きていけないなんてこともない。

ただ、それが少子化の今の日本で、毎年十数万人なんて事態になっているのはおかしい。

1986/12/16

酒が全く飲めない。アルコールが体に合わないようで、少し飲むと頭痛がし、酒の匂いが息に残って、その匂いにまた酔ってしまって気持ちが悪くなるという最悪のパターンである。

ほんとに飲んだことがないし、飲んでみようとか、無理にとか、付き合いだからとか、そんなことも全くなかったです。酒の席に付き合うのも学生のころ、仕事を始めてしばらくもまだ嫌だったけれども、そのうち嫌でもなくなったし、ジンジャエールでよく酔えるもんだと冷やかされても気にならなくなった。そして少くらい飲めたら良いなあと思うようになった。

1987年、40歳になる。実のところ僕は、いろいろ理由があって自意識過剰の結果、できないことや、したことがない事が多い。人前でマイクをもって歌を歌うなんてことは、30歳までは考えることさえおぞましいことであった。それが今では楽しい事のひとつになっている。

そこでフツと考えた。「よし、40歳をきっかけに酒を飲もう！」皆笑うのだ。

かくして練習が始まった。初めて自分の為に、酒屋にいった。そしていつだったか福知山の小牧さんたちと飯を食ったとき出てきた「桃の滴・吟醸純米酒」300mlを買った。一週間を目標に、患者が薬を飲むみたいに目盛りを計って飲んだ。目標を達成した。

次は先日、ロールシャッハ研究会で辻悟先生に「ドイツワインの白、良いやつから飲みなさい」と言われたのを思って、シュロス フォルラーツ' 81の中瓶を買った。これは4日で飲もうと決心してやり遂げた。

話を聞いた人は、300mlを一週間で飲む計画だといったら、「私なら10分もたせるのが難しい」と皆笑う

のだった。

初日にエイツとばかりに飲んだあと、忘年会の余興の練習にギターを弾いて、しんどくなってきたので寝ようとして部屋を出たら、足をとられて廊下にひっくりかえってしまった。嫁さんはゲラゲラ笑っているばかりで、全くなつてこった。

次の日からは飲んだらサツと蒲団にはいることにして、無事続けている。幸い次の朝まで残っていることはない。(あたりまえか！)

この努力の結果、今年の忘年会では最初の乾杯のシャンペンをなんと二杯も飲んでフラフラになってしまった。しかしちょっとうまかったりもしたのだ。

回りの人達の世話になって酔いを冷まして、無事出番をすませ、二次会ではまたストロベリーフィズをしっかりと飲みきった。そしてこれでまたフラフラになってしまった。歌を二曲歌って、介抱されて、いやーまったく忘年会らしい忘年会で、これはなかなか良いもんだわいといつぎの練習用の酒を物色しているところである。もうちっと飲めるようになったら、飲みにいこか！！

あとにも先にも一度だけ、アルコールがたしなめるようになりたいと思って挑戦したのがこの時だった。そして敗北した。

それ以来、少しでも飲めるようになどという努力はやめた。その結果、冗談に一口飲むことすらなくなった。

1986/12/23 TUE

福知山児童相談所で心理判定テストカンファレンスがあった。4年前まで福知山に住んでいて、よく駅前のごぶきやタカラブネでケーキを買って帰った。

いつごろだったか、駅前東映という映画館がつぶれて、そこに建ったビルの一階に「フランス」という名のケーキと喫茶の店ができた。夕方には売りきれてしまうケーキも多い、少し小さめのおいしいケーキ屋さんだった。仕事の帰りにはひとりよくアメリカンコーヒ

ーとモカとかフリーズとか名付けられたケーキを食べた。

京都に転勤になってから、わりにあちこちのケーキを食べた。伏見桃山のアスワとか、北山通りにあるとても高いケーキ屋さんとか、セカンドハウスのパウンドケーキとか、ココリコのパイとか、いろいろそのほかにも食べた。

しかし一番おいしいのは福知山のフランスだ。僕はそう思う。福知山へ出張があると、あのケーキが食べたいと思うのだが、定休日の水曜日と重なることが多くてなかなかチャンスがなかった。

ところが今回、クリスマスイヴの前日に出張で行くことになった。一月も前から手帳に”ケーキ予約”と書いて忘れないように、福知山児相の川崎くんにクリスマスケーキの予約をしてもらった。

当日、仕事を済ませるとワクワクしながらフランスに行き、「あらーこちらへ出張ですか」と店の奥さんに言われながら3200円の大きい箱を受け取った。そして鉄川さんと川崎くんと飯を食い、お茶を飲みながら「よにんばやし」(自分たちで発行していたミニコミ誌)の企画会議をした。

楽しく話はずんで、最終の京都行きの列車に三人で乗った。僕は京都まで、鉄川さんは高津まで、川崎くんは綾部まで。

発車直前になって「団君ケーキは？」と鉄川さんがいう。「アッ…」列車を降りて取りに戻れば、京都に帰るには後の寝台特急しかない。車掌さんに聞けば「寝台券と特急券が要りますから7100円かかります」という。「ア~~~~ア」と涙ながらに諦めた。ほんとに縁がない。

翌日、京都駅ポルタのバイカルでまた3000円のショートケーキを買った。こんな風に人は思い出を作ってゆくものなのだね。



懐かしい昔話である。30年経つと、皆、次世代の家族に展開があって、われわれ世代の物語は昔話になる。

この時、家族は福知山市厚での11年間の生活に終止符を打って、京都市東山区に暮らしていた。私の転勤によるものである。

子ども達は皆、京都府の田舎、福知山で育った。それから30年経って、長男は横浜で、次男は芦屋で家族を営んでいる。末娘はこの11月に、NYで演劇学校を卒業したところだ。私達はこの後、宇治市を経て滋賀県大津市の今の住まいにたどり着いた。

人は誰も長い長い旅をするものである。どうやら私の旅はもう大きく動くことはないが、次世代はまだまだ、あちこちにその足跡を刻み続けることだろう。